

JELA NEWS

ジェラニュース 第51号 2020年 4月15日発行 発行責任者 渡辺 薫

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラ・プレカリア(祈りのたて琴)／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

お前たちは、わたしが歩いてきたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言う。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。 マタイによる福音書25章35～36、40節



サンパウロ教会の書き初めは「私の希望」

この号にはこんな記事が ...

【P2～3】 ブラジル支援：元気もりもり森 一樹のブラジル派遣記 その3(最終回) 【P4～5】 奨学金：「私も難民、テクノロジーでロヒンギャ民族を守りたい！」アブラハ・デサレ / 「私のルーツ、アフガニスタンの問題を解決したい！」植松滋英 / 「アフリカと母国ギニアに日本の優れたシステムを導入したい！」バリー・アマドゥ 【P6】 カンボジア水プロジェクトに日本政府の助成金 【P7】 新理事長古屋四朗就任の挨拶 / 世界の子ども支援チャリティコンサート 2020 について 【P8】 皆様のご寄付によって実施された 2019 年度の JELA の事業 / 編集後記

元気もりもり森 一樹のブラジル派遣記 その3(最終回)



Rio Grande do Sul 州の日系コミュニティで家庭集会

Olá!!! Tudo Bem? いつもお祈りに覚えてくださってありがとうございました。お陰様で元気に楽しくブラジルでの活動を終えることができました。

大変なプレッシャーと神様の導き

この一年間は、間違いなく私の人生に大きな影響を与えた一年でした。日本とは異なる文化の中で、知らない言葉を一から初め、今までに経験のない働きがたくさん与えられ、ブラジルに来なければきっと無かったであろう、たくさんの人との出会いとそして交わりが与えられました。それと同時に、こんなにちっぽけで弱い私を神様は用いてくださっていて、そして神様はいつも私のいく道を守り、導いて下さっているという強い確信がこの一年を通して与えられました。振り返ってみると、ブラジルに来た当初はたくさんの不安と心配が私を支配していました。というのは、昨年3月末に日本へご帰国された徳弘浩隆先生(現岐阜・大垣教会牧師)が10年もかけて積み重ねた様々な働きを、ブラジルの「ブ」の字も知らず、ポルトガル語も分からず、そして牧師でも神学生でもないただの日本人大学生の私が続けていくことは、大変なプレッシャーだったのです。また、去年は、日本から牧師先生をブラジルに派遣するプログラムが徳弘先生をもって終了したため、日系サンパウロルーテル教会の歴史の中で常にいた日本人の牧師がいなくなってブラジル人の牧師先生の

みとなる事情もありました。そのショックを和らげつつ、ブラジル人の牧師と信徒の間に入りながら、教会がうまく歩み出せるよう手助けするようにも言われていました。

眠れない日々

私が徳弘先生から引き継いだのは日系サンパウロルーテル教会の宣教活動の一貫として先生が行っていた、日本語教室、パソコン教室、ジアデマ地区の子ども教室、そして前述のリオ・グランデ・ド・スル州訪問のような、遠方にある日系コミュニティへの訪問でした。しかし、時間の経過と共に日本語礼拝での信徒説教の奉仕や奏楽奉仕、パソコンやプリンターといった電子機器の修理、そして週3回だけだった教室(日本語、パソコン、子ども教室)は、依頼がたくさん舞い込み、信徒さんや日本からの駐在員のお子さんへの日本語や英語の個人教室など、週13もの教室数に膨れ上がりました。自分の中では、毎回失敗と反省の繰り返しで、奉仕や訪問や諸教室をなんとか続けるのに精一杯だったのをよそに、周囲から求められる働きや期待は日を追うごとに増していくかのようでした。そんな要望や期待に応えられず、落ち込んだり、自身に苛立ちを覚えたり、眠れなくなったりなる日が数え切れないほどありました。

何とかやってこられた理由

しかし、そんな中でも何とか一年間やってこられたのは、私個人の才能や努力のおかげではなく、全ては神様の備えがあったからです。例えば、特別に日本で専攻としていたわけではありませんでした、何気なく興味を持って少しかじっていたパソコンやスマホ、電子機器関係の知識のおかげで、ポルトガル語が分からず、息子や娘にも呆れられ、ブラジルの情報社会に置き去りにされていた、お年寄りの方々に、パソコンやスマホの使い方を教えたり、故障した彼らの電化製品を直してあげたりする事ができました。本や新聞を読むのが好きで、日本語の文法や独特の言い回し、表現に関心があったため、日本語教室で言葉の語源や文法的な説明を求められても、何とか教える事ができ、ブラジル人から日本語の個人教室の依頼をたくさんいただきました。

音楽が好きで、趣味の範囲でピアノやギターの経験があったおかげで、ジアデマ地区の貧しい子供たちに音楽を教える事ができたり、礼拝で奏楽の奉仕をする事ができたり、各地の家庭集会で賛美歌をリードして歌わなければならない場面でも、臆する事なく歌う事ができました。自身の専攻ではないけれど、外国語を話したり、勉強したりするのが好きで、英語やフランス語、韓国語など多言語に触れた経験があったおかげで、英語教室の依頼をいただいたり、なによりも、初めて会ったブラジル人全員から驚かれるくらいに、ポルトガル語が話

せるようになりました。

神学校や説教を作るための特別な訓練を受けてきたわけではありませんでした、大学で多くのクリスチャンとの出会いがあって、共に聖書研究や祈祷会をする機会が与えられていたので、各地での家庭集会や礼拝での説教の奉仕も何とか全うする事ができました。そして、いつも私の生活を気にかけて、「ちゃんと食べてる?」「足りないものは?」と心配し、祈ってくださる神様の家族がブラジルでも与えられました。

ブラジル最南端でも日系人が待っていた

ブラジル最南端に位置するリオ・グランデ・ド・スル州で、2ヶ月に1度、この地に住む日系クリスチャンコミュニティを訪問し、日本語での家庭集会を行いました。私の住んでいた所からバスで約20時間、飛行機でも一時間半かかる場所です。歴史的にはドイツやイタリア系の移民が開拓した地域であるため、ブラジルの他の地域と比べてルーテル教会が多く存在しています。同地には、日本語での礼拝が行われている教会は残念ながら一つもあ

りません。しかし、日本から遠く離れた場所であっても、日本語で聖書を読み、そして日本語で交わりを持ちたいと願う日系人の方々が現在もなおいらっしゃって、毎回の訪問ではそんな日系の方々を訪問し、日本語での集会を行ってきました。私は6度訪問しました。非常に印象深い経験となりました。

一生モノの経験

不安と失敗と反省と後悔の毎日でしたが、そんな欠けだらけの弱い私が何とかここまでやってこられたのは、他でもない、数え切れないほどの「神様の備え」があっ



ニテロイルーテル教会



リオのカーニバル



青年の集まりで、日本についてのプレゼンテーション



日系サンパウロ教会青年会による特別賛美



楽しい愛餐会

特集：国際青年交流奨学金事業

JELA の国際青年交流奨学金事業では、将来日本と世界の架け橋となることを目指す人を対象に、給付型の奨学金（返済不要）を毎年数名の方に提供しています。今回は奨学金特集として、JELA 奨学金受給者のアブラハ・デサレさん、植松滋英さん、バリー・アマドゥさんの3名の方からご寄稿いただきました。

「私も難民、テクノロジーでロヒンギャ民族を守りたい！」

アブラハ・デサレ
(Abraha Desale Tesfamariam、エリトリア出身)
写真①- 右ピンクのシャツが筆者

私は、早稲田大学のアジア太平洋研究学部で哲学博士号を修得するために学んでいます。私の研究の目的は、ブロックチェーンテクノロジー（最新のデジタルツール）を活用して、ミャンマー政権に迫害されているロヒンギャ民族の人権と公正さを守ることです。難民もいずれは社会の一員として貢献できる、という明るい未来を目標として、草の根レベルから国際レベルまでどのような対策がとれるのかを学んでいます。この博士課程は、私にとって、難民社会のために貢献する時期だと思っています。世界の避難民増加は、現代社会が抱える大きな課題の一つです。2015 年以来、避難民の数が 6850 万人を超えました。世界の人口と比較すると、110 人に 1 人が

家や母国から逃れることを余儀なくされていることとなります。最近のメディアでもとりあげられていますが、先進国の多くがテロの可能性や職を奪われることへの恐れから、難民たちの受け入れを拒否、または厳しく制限する傾向にあります。私はむしろその逆の意見で、難民は社会の生産性と幸福に貢献できる存在と確信しています。

私自身、難民として来日したため、日本での生活は大変で、孤独と苦痛の日々に耐えながら必死に勉強してきました。言葉は生きて行くための重要な鍵だと信じて、日本語や日本文化も理解しようとしています。完全ではありませんが、ほとんどの言葉は聞き取れますし、多少は会話もできます。国籍は違いますが、「日本人」になった気がすることもあります。これは、日本で生きていく上で大きな自信となりました。来日して苦労している方たちには、語学の勉強を強くお勧めしたいです。

今年、「Refugee and Justice, Japan」という NPO を設立しました。ここを基盤に、UNICEF や JICA などのような救援機関の活動に参加し、研究助手や難民コンサルタントを務めたり、難民政策問題についての学術論文を作成することが当面の目標です。

最後に、私が職務を全うするために常にサポートしてくれた JELA に感謝いたします。JELA には今後も難民の方たちへの金銭支援のみならず、精神的、道徳的、慈善的にサポートし続けて欲しいです。そして難民とともに立ち、ともに行動して欲しいです。



①

「私のルーツ、アフガニスタンの問題を解決したい！」

植松滋英 写真②-お父様(右)と筆者

私は入学から現在まで、JELA奨学金のおかげで大学に通っています。大学では、充実した学習環境と信頼できる仲間、良い先生に恵まれ、毎日を楽しんでいます。そのような日々をくださったJELAに感謝して毎日を大事に過ごしつつ、もう3年生も終わりに差し掛かっているという現実寂しさを禁じえません。

大学では、中国とそれを取り囲む国々の社会事情を主に学習しています。また、以前より希望していた言語学の先生のゼミにも入ることができました。3年生の大きなイベントの一つに、中国語で行う演劇コンテスト「小品(シャオピン)」があります。小品では、ゼミの仲間と協力して中国人の観客に伝える表現力と言語力を磨くことができ、同時にゼミの仲間との絆を深めることができました。

普段の生活では、ほぼ毎日生活費を稼ぐ為にアルバイトをしています。以前までは自宅の近くのユニクロでアルバイトをしていましたが、行動の幅を広げるために、



②

現在では品川の飲食店でアルバイトを始めました。外国人の多い品川なら中国語の他に英語にも多く触れられると考えたからです。

私が言語学を学ぶ理由は、日本や世界の為に働く架け橋になりたいからです。その思いは大学に入学した1年生の頃から変わっていません。そして、私のルーツであるアフガニスタンにも貢献したいと考えています。中国とアフガニスタンは76kmもの国境線で隣接し、様々な問題を抱えています。中国語、英語を用いて、それらの問題に取り組むのが私の今の夢です。

JELAとの出会いがなければ、私は自分の境遇を卑屈に思い、人生に希望を見出すことができなかつたと思います。しかし、JELAとの出会いで全てが変わりました。今では、幼い頃に亡くしたクリスチャンの母、アフガニスタン人の父(写真②-右)、育ててくれた里親さんなど全ての人に感謝をし、そして今度は私が世界で苦しんでいる人々の事を助けたいと思っています。私は、このような希望を与えてくださったJELAに心から感謝しています。

.....

「アフリカと母国ギニアに日本の優れたシステムを導入したい！」

バリー・アマドゥ
(Barry Amadou A ギニア出身) 写真③

「感謝！」学校に戻ることができ、長年の夢がかなったことを考えると出てくる言葉です。来日一年目に気づいたことは、それまで取得した知識をさらに向上する必要があること、それ以上に母国アフリカの人々のために勉強する必要があるということです。

これまで、大きな犠牲を背負って、私に何回もチャンスを与えてくれた両親をはじめ、関わった社会全般のことを思うと、私の目標が個人的なところから出発していることを思います。私は、妊婦、乳児、幼児の死亡率が高いギニアで生まれ育ちました。同国の教育システムでは、低識字率の問題、貧困層の増加の問題などが解決されずにいます。この背景を踏まえて、私を教育面で支

えてくれた家族、先生一同、そして多くの匿名の方々に感謝いたします。

日本のような先進国にたどり着いた私の義務は、母国の現状を改善するための第一歩として最善の教育を受けて、必要な知識を得ることです。今は、日常生活を通して日本社会を経験して、そのチャレンジが徐々に現実のものになりつつあります。母国が成し遂げようとしていることは既に日本で実現されています。それは、政治環境の安定、社会保障と健康保険の普及、広域公共交通機関の利便性、そして優れた教育システムです。

私が国際関係を専攻している理由は、必要な知識を蓄積し、それをを用いて、世界でも改善が最難関と言われているアフリカで、上記のようなシステムを取り入れる方法を求めたいからです。アフリカは常に進歩の可能性を秘めていると思いますので、専念すべきことは相互理解を深めること、知識を共有すること、資源を収集・把握すること、技術を応用すること、そして進歩のために活動する様々な関係者同士の協力を促進することです。

最後に、JELAの奨学金支援がなければ、再び学校に戻り、このように学ぶことはただの夢で終わっていました。私の夢を実現するためにかかわってくださった全ての方々に深く感謝の意を申し上げます。祝福を!



③

「国際青年交流奨学金」奨学生募集

JELAでは以下の要領で、大学等での勉強のために給付型奨学金「国際青年交流奨学金」の受給を希望する人を募集します。

- 対象者
 - (1)キリスト者としての成長を目的とし、国内外の研修・大学・専門学校(以下、「大学等」)において学ぶ者。
 - (2)社会と人々に仕えることを目的とし、大学等において学ぶ者。
 - (3)国際社会への貢献を目的とし、大学等において学ぶ者。
- 給付額・期間

一人あたり年額最大1,200,000円を最大4年間
- 選考方法

書類および面接による審査。
- 申込方法・締切

jela@jela.or.jpにメールか、JELA事務局に電話(03-3447-1521)で、申込書類をお取り寄せください。締切は受給開始希望年の前年10月末です。

カンボジアの水プロジェクトに日本政府の助成金

令和元年度「草の根・人間の安全保障無償資金協力」から約1200万円

JELA のカンボジアのパートナー NGO の Life with Dignity(ライフ・ウィズ・ディグニティ=LWD「尊厳ある生活」の意味) が ODA(政府開発援助) 草の根・人間の安全保障無償資金協力に申請を行った、ポーサット州レアン・クバーウ村給水システム整備計画(水プロジェクト)に対して、10万3千885米ドル(日本円で約1200万円相当)のご支援を日本国外務省からいただけることになりました。

JELA では、数年に渡って顧問のローウェル・グリテベック博士と奈良部慎平職員が、今回の水プロジェクトのために二度の現地視察や在カンボジア日本大使館との連絡・情報交換を行うなど、LWD の申請に全面的に協力してきました。

3月19日には、在カンボジア日本大使館を会場に日本国外務省主催の「令和元年度草の根・人間の安全保障無償資金協力 署名式典」が開かれ、LWD のスオン・ソピアップ代表ら関係者が参加しました。

在カンボジア日本大使館からは、LWD の水プロジェクトに対してどのような期待と評価をいただいています。

「レアン・クバーウ村は、水道や電気のインフラ施設が未整備の地域です。現在、住民は遠方の川まで長い時間をかけて水を汲みに行くか、割高な

価格で川の水を購入せざるを得ない状況にあり、彼らが自宅近くで安心して使用できる水道設備が望まれていました。本案件の実施により、村内に浄水施設が整備され、水衛生環境が向上することで、住民の基礎生活の改善が見込まれます」

JELA も式典へのご招待をいただいていたのですが、残念ながら新型コロナウイルス(COVID-19)の影響で渡航を断念しました。代わりに、在カンボジア日本大使館へは、貧困農村に対する給水事業へのご理解とご支援に対して心からの感謝を表する手紙をお送りすると同時に、水プロジェクトの成功のために LWD と共に努力することをお伝えしました。

レアン・クバーウ村の水プロジェクトは、2020年4月から3年間に渡って

▼草の根・人間の安全保障無償資金協力 署名式典参加者



▲署名式

行われる水道設備工事です。この工事の完成によって、968人(225世帯)もの人々の生活の質が向上します。工事は3年間で終わりますが、水は生活になくてはならない資源です。村人が自分たちの力で給水設備メンテナンスを行えるような末長く持続する仕組みを構築することも JELA の使命です。LWD と共にカンボジアの人々のために力を合わせて参ります。

カンボジアをご支援くださる皆さま、引き続きお祈りとご支援をよろしく願います。



▲レアン・クバーウ村に引かれる水道の水源地を調査するスタッフ



▲中央は JELA グリテベック顧問 右端が奈良部職員

古屋四朗 新理事長 就任の挨拶

一般社団法人日本福音ルーテル社団(JELA)の定時社員総会が2020年3月30日にジェラ・ミッションセンター(東京・恵比寿)で開かれました。今回は役員改選期にあたり、改めて理事9名と監事2名が選出されました。改選後の理事会では、2期4年間理事長を務めた森下博司が退任し、前常務理事の古屋四朗が新理事長に就任しました。新理事長による抱負を掲載します。

「目指すのは、聖書(マタイ25:35-36)に書かれている人の姿」

理事長 古屋四朗



110年の歴史を持つJELAの理事長に選ばれ、責任の重さを深く感じています。

JELAの始まりは、アメリカのルーテル教会の宣教師たちが日本で活動するための法人でした。やがて、教会だけでな

く、学校や福祉施設を持つ大きな組織になりましたが、戦争を契機にそれらの活動は別々の法人として分離しました。そして戦後の一時期のJELAは、宣教師の資産管理と活動支援だけの団体になっていました。

将来を模索する中で、1990年代の終わり頃から「JELAは90年の間、キリスト教の宣教を堂々と目的にうたい、社会に大きな貢献をして信用を勝ち得てきた。この立場を活かして、JELAにしかできないことに取り組むべき」との声が出てきました。こうしてJELAは、「キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人々に仕える」ことをミッションとする

団体として歩む道を選んだのです。

幸いにも私たちには、世界のルーテル教会系のNGOなど多くの団体と提携することができ、わずかな常勤スタッフでも多彩なプログラムを作り上げることができました。私はこれを「JELAモデル」と呼びたいと思います。

私たちが目指すのは、聖書に書かれている「飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねる」(マタイ25:35-36)人の姿です。

皆様のお支えによって、この姿に少しでも近づけるよう努力いたします。



JELAミッションセンターホールのステンドグラス(マタイ25:35-36)

世界の子ども支援 チャリティコンサート 延期のお知らせ

JELA は、日本福音ルーテル教会 世界宣教委員会との共催で、「第17回世界の子ども支援チャリティコンサート」の開催を準備してまいりました。

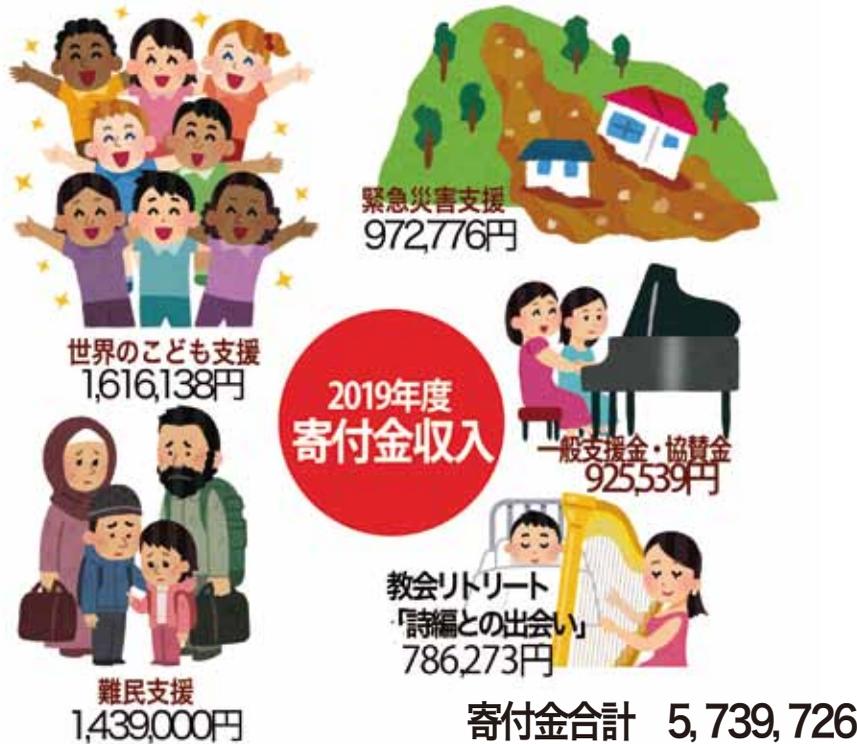
今年は、5月10日～6月28日の週末に、全国11会場を巡り、真野謡子さん(ヴァイオリン)と前田勝則さん(ピアノ、一部会場では後藤加奈さんの出演)によるデュオをお届けする予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大が危ぶまれる中、苦渋の決断として、今年のコンサートツアーの来年度への延期を決定いたしました。5月～6月は上記感染拡大は終息に向かうこと

も期待されますが、同時にご高齢の方を含む免疫力の低い方々への感染拡大を最小限にとどめる重要な時期とも認識し、今回の決断に至りました。来年は、今年予定された演奏者と会場で行えることを願っています。

チャリティコンサートでは、各会場寄付を募り、集まった寄付金は JELA の実施する「世界の子ども支援事業」のために用いられます。来年開催の暁には、ぜひご家族・ご友人をお誘いあわせのうえ、お近くの会場までお越しください。



皆様のご寄付によって実施された 2019 年度の事業



支援者一覧

支援者一覧(2019年10月1日～2020年1月31日)

青山学院大学系属浦和ルーテル学院小中高等学校 / 秋吉亮 / 明比輝代彦 / 尾嶋治 / 安藤淑子 / 飯田裕也 / 一橋和義・満留 / 市原周子 / 井上秀樹 / 岩越優子 / ガイテジ / 梅田久子 / 恰淑代 / 太田立男 / 奥山信子 / 大塚真佐子 / 大嶺愛持・裸霸武・十六夜 / 柿沢純江 / 勝部久子 / 金子佐年 / 亀川榮一 / 北川勝弘 / 京谷信代 / 九州学院みどり幼稚園 / 金銀淑 / り恵子 / 倉知延章 / 河野悦子 / 河野精一郎 / 小暮修也 / 小坂敦子 / 小松由美 / 小宮俊作 / 篠崎智恵子 / 渋谷洋子 / 新角房子 / 杉浦りえ / 杉浦佳子 / 杉山美紀子 / 高橋竜太 / 武井順太郎 / 立山久美子 / 田中美紗子 / 玉名ルーテル幼稚園 / 塚田政司 / 辻裕子 / 遠入美智子 / 殿村真弥 / 中川浩之 / 中山純郎 / 仲吉智子 / 那須幸 / 西立野園子 / 西垣親子 / 野上きよみ / 野田マサ子 / 芳賀美江 / 原田美知子 / 原田裕子・靖彦 / 深澤理香 / 福地明子 / 保坂和子 / 松浦雪子 / 南節子 / 南谷なほみ / 宗方美代子 / 村上洋也 / 村上裕子 / 村木直樹 / 粗山昭恵 / 森保宏 / 森河かよ子 / 森村和泰 / 山内恵美 / 山口初子 / 山田克子 / 山本了 / 良知賢治 / ルーテル学院幼稚園 / 若原奇美子 / 西日本福音ルーテル教会 / JELC 大分教会 / JELC 浦田教会女性の会 / JELC 下関教会チャーム会 / JELC 玉名教会 / JELC 博多教会 / JELC 保谷教会 / JELC 東教区事務局

以上、順不同・敬称略。ご支援ありがとうございます。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

いつもJELA実施事業をおぼえ、尊いお祈りとご寄付を頂き誠にありがとうございます。2019年度に皆様から頂きましたご寄付・賛助会費を謹んでご報告申し上げます。

2019年度、JELAは皆様からのご寄付に弊社からの支出を加え、以下の事業を支援・運営いたしました。

- ・プレスクール建設 (カンボジア)
 - ・コルカタ貧困地域の女児救済支援 (インド)
 - ・集会所駐車場整備(貧困地域児童のための活動支援(ブラジル))
 - ・ワークキャンプ運営 (アメリカ/インド/カンボジア)
 - ・チャリティコンサート運営 (日本・JELC 11会場)
 - ・次世代リーダー育成のための給付型奨学金支給
 - ・難民シェルター運営 (日本・都内2か所)
 - ・教会リトリート「詩編との出会い」運営 (日本・JELC 7会場)
- (*米国シオン・ルーテル教会からの支援を受けて実施)

※ 2019年内に緊急災害支援のためにいただいたご寄付につきましては、2020年以降実施する支援において用いさせていただきます。

JELA事業内容をより充実させ、継続的な支援を可能にするために、2020年も皆様にお祈り/ご寄付によるご支援をよろしく願っています。

編集後記

「わたくしといふ現象は 仮定された有機交流電燈の ひとつの青い照明です (中略) 風景やみんなといっしょに せはしくせはしく明滅しながら いかにもたしかにとりつづける 因果交流電燈の ひとつの青い照明です」宮沢賢治の詩集「春と修羅」の序の一節です。この詩に会った頃の私は、新聞配達をしながら大学受験を準備中という、青春真っ盛りの年頃でした。そして、多くの方がきっとそうであるように、私もまた、この詩によって、魂を揺さぶられるような、鮮烈な感動を味わった記憶があります。ほの暗い空間にありながら、他者との交流を求めて青白く点滅を繰り返す「私という現象」を俯瞰したのは、恐らくこれが初めてであったと思います。

今号のテーマである奨学金事業の記事を取りまとめる中で、JELA 奨学生の皆さん

が新しい選択肢や人々との出会いを経験している姿に、若かりし頃の自分を思い出していました。あの詩のように自身を俯瞰した時に、JELA 奨学生の皆さんにも、他者に青い照明の信号を送り続けるような、社会と人に積極的にかかわっていく人材に成長していったほしい、という願いが JELA にはあります。

ところで、成人してキリスト者となった私は、自身を俯瞰する目の背後にさらに大きな視野があることを知りました。神の愛のまなざしと、この方が決して揺るぐことのない計画をもって人類を導いているという信頼が、私の世界観、歴史観、人生観を形成するようになったのです。JELA の事業や本誌を通して神と出会う方が、自他を超えて聖書が示す広大な視野へと導かれますように。

(渡辺 薫)



国連で合意された17のグローバル世界共通の目標を「SDGs(Sustainable Development Goals: エスディー・ジー・ズ)」といいます。JELAはSDGsに賛同し、よりよい国際社会の実現に貢献しています。

JELAの活動にご支援を！
各種献金のご送金は下記をご利用ください。



ホームページからクレジットカードでご寄付いただけます！



Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523
Email: jela@jela.or.jp
HP: http://www.jela.or.jp
郵便振替口座番号: 00140-0-669206
加入者名: 一般社団法人日本福音ルーテル社団